

WRESTLE REVENGER

恥辱のタッグマッチ

レスリング タッグマッチ レヴェンジャー

立ち読み版

小説 武猛

挿絵 DigDug



プロローグ	
第一章	女王再降臨
第二章	闇と飛翔
第三章	乱入
第四章	陰謀
第五章	闇の狂宴
エピローグ	

登場人物紹介

Characters



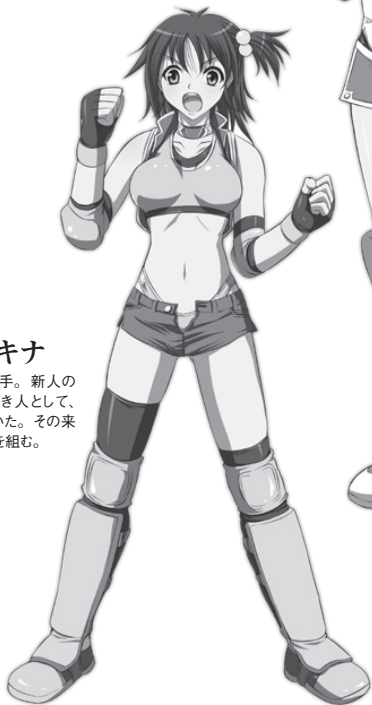
くるす まこと 来栖 真琴

以前女子プロレス団体 NLP に在籍、しばらくフリーとして活躍していたが、今回参戦のオファーを受け、再び NLP のマットに戻ってきた。



まきた 榎田 アキナ

NLP の若手選手。新人の頃は来栖の付き人として、彼女に憧れていた。その来栖と今回タッグを組む。



ほんだ 本田 しぐれ

現在の NLP のエース。来栖が戻ってくることを受け、これまでの借りを返そうと画策する。

ふじむら 藤村

現 NLP 社長。元レスラーで、ツボを突く攻撃を得意としていた。巨漢の中年。

おおさき ごうじ 大崎 剛司

現在活躍中のレスラーで、来栖に好意を寄せている。

くろかわ きょうしろう 黒河 狂四郎

大崎と同じ団体に所属、本田と結託して来栖を貶めようとする。

第二章 闇と飛翔

再度レフリーにどっちが出るのかと急かされて、アキナがロープを潜って外に出た。

「よっしゃ——っ！」

真琴は気迫の籠もった声を上げ、ロープを掴みながら屈伸をしたあと、対戦相手とリングの対角線上で対峙する。

カアアアッとゴングの音が鳴り響いた。

真琴と雪野は遠くで睨み合いながら、円を描くように周囲を回りだす。

「くーるーすっ、くーるーすっ！」「ゆっきーのっ、ゆっきーのっ！」

観客のほうからはまたもや大きな来栖コールがかかるが、それに混じった二、三割は雪野へのもの。彼女がプロレスの技術を売り込んでいるのは当然だが、ファンがつくもう一つの理由は真琴と同じく、豊満な胸と引き締まった腰つき、そしてふっくらと張り出したヒップといった体つきの魅力である。

本田が組んでいるユニットはヒールでありながらもなかなかの人気をキープしている、その一翼を担っているのは間違いない雪野だろう。なにしろ、彼女の身体見たさだけで足を運ぶファンが、毎度何十人といえるのだ。

「ふううんっ！」

真琴と雪野の指が絡み合い、頭をぶつけて力比べをする。しばらくは膠着状態だったが、先に真琴が動いた。組んだ腕を横一文字に伸ばし、相手をそのまま後ろへ投げてしまう。

ドシンツと背中を打ちつけ、茶髪の雪野は呻いて顔を顰める。その首へすかさず脚を絡ませ圧迫する元女王。首四の字固めをやられて苦しそうにしていた雪野は、それを外そうと腿の間に手を入れて、身体をバタつかせていく。

しかし真琴はそうはさせまいと両太腿に力を込めながら、リング外に待機する本田を牽制するようにキツと睨む。ポストに手を置く本田も目を細めて睨み返すが、まだ序盤のため彼女も助けにいかうとはしない。

段々と息苦しくなつて顔が赤くなつていく雪野は下半身の筋力を使い、真琴を引きずりながらなんとか片脚を下段のロープにかけた。

レフリーに催促されて真琴がゆつくり技を解くと、雪野は首を擦りながら素早く後方へ下がつてそのまま本田とタツチ。それを見て真琴もすぐにアキナと交代した。

一瞬本田はギロツと真琴へ鋭い視線を飛ばすが、すぐに近くににいるアキナのほうへその矛先を切り替える。

「うおおりゃあつ！」「ぐぐうつ、ぐううんつ！」

アキナと本田も真琴達のとくと同様に力比べをする。

そこから一転してアキナがヘッドロックに出ると、本田がすぐに彼女をロープへ飛ばした。戻つてきたアキナは肩でドスンと本田へ体当たりするが、少し後退するだけで全く倒れない。もう一度ロープを使ったアタックを試みたアキナだが、今度は迎撃され、しか

も首筋にエルボーを食らってしまふ。

「アキナーっ、がんばれーっ！」「負けるなあっ！」

それでもめげずに三たびロープの反動で本田へ向かう。またエルボーで迎え撃とうと構えていた本田だが、今度は虚を突いたドロップキックを浴びて後方へぶっ飛んでゆく。

（相手が一回で倒れなくても、倒れるまで何度でも立ち向かう。それがアキナのいいところだ）

リング外の真琴がそう観察していた。アキナは小手先の技術に頼らず、根性と執念で闘う数少ないレスラーである。

またもやアキナがロープを使用してダメ押しを狙うが、すつと横へ避けた本田が伸ばした腕で逆に首を絞められてしまふ。

「しまっ、あぐっ、ぐうううっ!!」

「お前のペースにハマってたまるかよっ、ふうううんっ!!」

そのままググッと腕で首を圧迫されて、アキナの顔が険しく赤くなっていく。

本田はすぐさま手を組みかえて後ろから彼女の両腕と首を固定し、ブリッジするように後方へと投げていく。受け身もできないアキナの後頭部が真っ逆さまに落ち、ボゴツと鈍い音を立てる。しかしそのまま固定せず、本田はすぐに立ち上がった。フルネルソン・スープレックスで投げられたアキナは、衝撃で呻きながら後頭部を両手で押さえて脚をバタ



バタさせ苦しがつている。その隙に本田は雪野にタッチし、さっさと引っ込んでしまう。

「この野郎っ！」

同期の相手はタプンと巨乳を揺らしながら駆け寄り、日頃の鬱憤を晴らすかのようになり、何度か脇腹へ蹴りを入れていく。続けてアキナの髪を引っ張って立たせ、ロープへと投げられた。

「アキナっ！」

意識が少し薄れたとき、真琴の声にハッと覚醒する。アキナは、同年代のライバルにだけは負けたくないと思いを決し、カッと目を見開いて雪野のもとへ戻っていく。右腕を折りたたみ、懐に飛び込んだライバルの首筋へ振り下ろす。

肘は人間の最も硬い部分の一つであり、全く鍛えなくとも相当の威力を望める技だ。それ故多くの者がよく使用するが、それでも人によって威力の違いが出てくるのは、タイミングや肩の強さなどが関係してくるからである。

首横にドスンッと一撃を与えるが、雪野は後ずさるものの堪えて倒れない。

「やりやがったなっ、アキナアアッ！」

キッと眉を上げ、彼女も腕を振り上げて首筋に向けたエルボーを叩きつける。アキナは避けずに敢えてその肘鉄を食らった。ポコッと肉音が鈍く響くとともに、クラッと頭が揺れた。だがそれを堪え、こちらも肘を打ちつけていく。

次第にエルボー合戦の様相を呈し始め、お互い雄叫びを上げながら打ち合う。

「うりゃああつ!」「このおおおつ!」

意地と意地のぶつかりあいが続いたが、強烈な一撃を貰ったアキナの頭が空白に飛んで、手が止まってしまう。その機を逃さず、雪野が最後の一発を打ち込んできた。

ぐらりと揺らめいたアキナが崩れ落ち、膝をついていく。

エルボー合戦の勝利を確信した雪野がそれを見下ろし、フンツと息を吐き捨てた。本田のもとへ帰ろうとする。

「アキナアアツ、それで終わりかああつ!」

その様子を見ていた真琴は、ロープから前のめりになって怒鳴った。それで後輩はハツと我に返り、背中を見せている雪野へダツシユする。

「雪野っ、後ろっ!」

本田の声で彼女が振り向いたとき、アキナはその足もとに潜り込み、片脚に絡みついていた。あつという間に雪野は倒れ、脚から激痛が走る。

「ぐあああああつ!?!」

アキナはアキレス腱に腕を当て、もう一方の腕で締め上げていく。

本田に手を伸ばそうとする雪野だが、そうはさせまいと反対側にゴロゴロ転がるアキナ。

雪野は頭を掻きながら苦しみに耐えていたが、反撃はままならない。

そのまま反対のコーナーポストまで引きずっていきタツチ。

真琴は動けなくなつた獲物の背に回り、その頬を締めつけるようにがちりと腕を巻く。雪野は横向きに締めつけられた顔を激痛で歪めていた。

ある程度痛めつけるとアキナに交代し、同じく締め技で責め立てる。さつきは本田組がペースを握りかけていたが、今はすっかり真琴達の流れになつていた。

気がつけば試合開始から十分が過ぎていた。

まだ一回しか交代していない本田はイラついていた。実はそれこそが真琴達の作戦であり、もつと言えば敢えて真琴と本田が直接的に戦わないようにしていた。

(雪野めえ、来栖のペースにハマりやがって……)

案の定、本田はついに我慢しきれなくなつた。

リングへ入り、雪野を締め上げる真琴へ蹴りを見舞う。だがその程度で流れは変わらない。本田の行動は交代を繰り返す真琴達に邪魔され、雪野は痛めつけられていく。

(こうなつたら、いよいよアレをやるかっ!)

本田にも策があった。ニヤツとして舌で唇を舐め回す彼女にとって、勝ち負けは二の次だ。真琴に策を仕掛けることこそが本田の狙いだった。

「こんのおおつ、いい加減にしろっ!」

また本田が割つて入り、フェイスロックしている真琴へ何度も蹴りを入れる。その間に

隠し持っていた細長い棒状のものを、真琴には見えないように雪野へ渡していた。

「やれっ、雪野っ！」

本田が叫んだ瞬間、雪野は真琴の顔に向けて口から何かを噴き出す。黒と緑色の混ざった液体が真琴の美貌を染め、彼女はあまりにも目が痛くて視界を閉ざしてしまう。

観客はブーイングを飛ばすが、一部の者は凶器の存在にも気づいていた。

「何やってんだ雪野、ちゃんと試合をしろっ！」「来栖っ、後ろ後ろっ！」「レフリー、ちゃんと注意しろっ！」

注意を促す観客の声は様々な怒号に混じって、毒霧を両手で拭い取っていた真琴には届かない。その隙を狙って、雪野が後ろから近づいていく。

「くあああああっ?! ぐっ、ううっ……」

手にした凶器で何度となく恥骨付近をプツリと突き刺す。

コスチュームの上でうつつすらと血を滲ませ、真琴は鋭い痛みで蹲ってしまう。凶器の存在に気づいたアキナがロープを跨ぎ雪野の手を蹴ると、その凶器、銀色に輝く針状のスポークがリング外へと転がっていく。

本田もそれ以上の乱入は許すまいと、アキナへタックルしてリングの外へ叩き落とし、場外で乱闘を繰り広げ始める。

リング上の真琴は目の痛みだけでなく、恥骨付近からの痛みもあって、周りで何が起き

ているのかすら把握できなかった。レフリーも混沌とした事態に困惑してついていけない。

雪野がここぞとばかりに、ドスドスツと背中を蹴り叩く。

「今までよくも痛めつけてくれたなあ、来栖うっ、おらあつ！」

真琴は混乱したままに、彼女の蹴りを耐えるので精一杯である。そのまま這いつくばる形になると、雪野が元女王の右膝を自分の脚に引っかけて関節を封じ、背中に覆い被さりながらフェイスロックをかけてきた。

「があっ?! ぐうっ……ゆっ、雪野おお」

S T Fを仕掛けられた真琴の全身を苦痛が襲う。

「くーるっすっ、くーるっすっ！」

頭部を締めつけられ意識を失いそうになったとき、大きな声援が真琴の耳に入る。それでようやく我に返った真琴は、モゾモゾとゆっくり這いずりロープに手を伸ばす。

なんとかロープブレイクで雪野を振り解くことができた。状況を確認しようとする。

（目は……なんとか見えるようになったな。膝も………たいしたことはない。あと腰は………はあぐうううっ?! な、何だ、身体が急に熱くなって……）

スポークに刺された臀部近くの痛みは次第に引いていくが、代わりに身体の芯が急に燃えるように熱くなっていった。ロープを掴んで立ち上がろうとするが、腰から下に力が入らず、ブルブルと痙攣に近い状態になっている。

雪野はすかさず腹部への鋭い蹴りを見舞う。バシーンッ、バシーンッと場内に鳴り響き、真琴が立つことを許さない。しかし身を起させないのはその衝撃よりも他の要因が大きかった。時が経つにつれ、心臓の鼓動が速くなつて頭がボーッとしていく。

レフリーが割つて入つて雪野を止めようとするが、払いのけられてしまう。

(うっ、ど、どういうことなんだ？ 身体に力が入らないし……そ、それに……)

この熱さは運動による火照りではない。明らかに下半身から伝わってくるものだ。

まるで発情状態に陥つたようで、秘部もじんわりと濡れていく錯覚がある。そのおかげで戦いへの集中力が切れてしまい、腹部への蹴りを防ぐこともできない。

(ううっ、こ、このままではヤバイ。こんなのが続いたら……も、漏れてしまうっ……)

身体は疼く一方で、これまで感じなかつた尿意も催してしまふ。それは、このままの状態が続けばここで失禁してしまいそうなくらいにまで迫っている。

このままではまずいと思つた真琴は、雪野の脚に必死で集中した。その間にも何度か蹴りを食らいながら、かろうじて蹴りをキャッチして抱え込む。元女王は相手に寄りかかるようにしてそのままリングの中央まで押し出し、ドラゴン・スクリューを仕掛ける。回転とともに雪野も旋回、マットに叩き伏せた。

反撃に歓声上がる。しかし、優勢なはずの真琴の顔が赤くなつて息も乱れている不自然さに、一部の客が首を傾げていた。

第五章 闇の狂宴 その1

「うがあああつ?! うぐうう……!」

後頭部から落ちてしまい、頭を押さえてゴロゴロ転がったのたうち回る。

試合開始から十分程度が経っていた。ゴリラ男は赤コーナーにいる本田に向かって無言で頷いた。

それを合図にして、本田がアキナのほうへ駆け出す。女王様が肘打ちをすると、後輩はエプロンサイドからリング下へと落下した。

さらに女王様は追いかけて、リング下に降りて後輩を捕まえ、客席とリングの間にある鉄柵へ投げていく。

「あうううつ?!」

『来栖が投げられている隙に、場外ではアキナと本田が乱闘して、アキナが鉄柵にぶつかったあああつ!』

ガシャ——ンツと大きな音と衝撃を背に受けて、後輩は四つん這いになって痛みを堪えている。

リング上で頭を押さえている真琴には、黒河が上に覆い被さってフォールしに行く。

「あああつ?! んう……!」

さらに彼は押さえつける際に、豊満な肉球体にギョツと手を当てていった。

「ワーンツ、ツウツ!」

レフリーは前にアキナがフォールしたときより、早くカウントを入れてくる。

真琴はカウントスリーを叩かれる前に肩を上げるものの、それ以上は動けない。ツボを突かれた影響が残っているところに、胸を押さえつけられたことがきっかけとなって、身体が疼き始めていく。

（くうっ……力が抜けていく……。また身体の芯が熱くなって……。くううんっ！）

彼女がまだ倒れている間に、金髪ゴリラはコーナーにかけてあつた鉄鎖を手を取った。ようやく立ち上がろうとしていた真琴の首へ、それをグルグルと巻きつける。

「があああああつ?! ぐううううっ!」

『急に黒河がチェーンを持ち出して、来栖の首に巻いていくうううっ! これから一体何をするといいのでしょうか?』

首に何重も巻かれた鎖を緩めようと両手で掴むが、そこを黒河に引きずられてしまう。チェーンが彼女の首を圧迫し、息が詰まって眉を歪ませた。

リング上の出来事に気づいたアキナは、ロープを潜りリングに入ろうとするが、審判に止められる。

「ちよつとレフリーッ、あれ反則でしょうっ?」

後輩は彼に詰め寄って文句を言うが、自分のポストに戻れと注意されてしまう。それでも引き下がらない後輩が出ようとすると、審判は通せんぼして反則カウントを数えるため、

仕方なくコーナーサイドに戻った。

「真琴先輩っ！ おいつ、レフリーっ、いい加減にやめさせろっ！」

ずっとアキナ側のほうを向いていたレフリーが、ようやく黒河に注意しに行く。

『アキナを注意したあと、ようやくレフリーが黒河を注意するがぁ……。あぁっとおっ』
うるせえと言いながら腕を振った金髪ゴリラに突き飛ばされ、レフリーは場外まで転がっていつてしまう。わざとらしいような気もしたが、彼は身体を伏せて気を失った。

『黒河の腕がレフリーに当たって、場外までとばされたぁぁっ！ これではリング上が無法地帯となってしまうぞおっ！』

リングの中央では金髪ゴリラが、チェーンを真琴の首にだけでなく、万歳をさせる形で上げさせた腕をグルグル巻きにしている。さらに彼が腹部に乗っかってしまい、完全に真琴は身動きが取れなくなってしまった。

(いつ、一体これから何をするというんだ。ううっ……)

喉に食い込んだ鎖に違和感を覚え、息がまともにできない真琴は、何か技をかけられるのかと不安になりながら黒河の顔を見上げる。

しかしゴリラ男は攻撃を加えるのではなく、丸々と盛り上がっている彼女の乳房に両手を伸ばしてムニユツと握り込む。

「んううんんっ!? ……こっ、こんなところで、何をするん…だっ、んんっ……」

彼に胸を揉まれると同時に、ポツと顔から炎が出たように熱くなってしまう。

「おい、来栖う。ここはNLPとか、普通にプロレスをするところじゃねえんだぞ。これからアングラ・プロレスとはどういうものか、教えてやるからなあっ！」

目を見開いてこちらを見下す下品な顔で返答した黒河は、胸全体を覆うように大きな手を被せていく。

「へっへっへっ、相変わらずでっけえおっぱいだなあ。俺の手で隠しても、全然あまるじやねえかっ！」

何度も力を込めてコスチュームの上に指を埋める。真琴は脊髄すらも痺れさせ、それだけで吐息を漏らし悶えてしまう。

(…：そうだ、これは普通のプロレスじゃないんだ。でも、だからってこんなこと、許されるはずがないっ！)

彼女は改めて気づかされるが、両腕を縛られ、腹部に百二十キロの男が乗っかっていて、身動き一つ取ることもできない。

『ああつ、ついに黒河が来栖の巨乳を揉みだしたぞおっ！ここからアングラ・プロレスの、凌辱ショーの始まりですっ！』

実況とともにカメラも横側からズームアップし、真琴の瓜のような乳房が大画面のスクリーンに映し出された。

「黒河ああつ、何やってんだああつ！」

アキナからは彼の身体が盾となつてスクリーンに映るまでどんな様子かがわからなかったが、状況を把握しようやく飛び出そうとする。

だがリング下の後方に迫っていた本田が後輩の脚を掴んで引きずり落とし、またもや鉄柵に投げられて背中を強打してしまう。

その隙に女王様はもう一本チェーンを持ち出し、後輩の両腕だけでなく胴体にまでグルグルと巻きつける。

「しばらくそこで先輩が廻られるところを、見物してるんだなっ！」

「ぐうっううっ……放せつ、放せええっ！ 先輩つ、せんばああいつ！」

黒き女王様の脚で腹部にドスツと一撃を入れられ顔を歪ませながらも、身を揺すり、リング上へと喚くアキナ。

「あの野郎っ！」

この非常事態に大崎も黙っていられず、エプロンに足をかける。

その途端、黒河の仲間三人に押さえつけられてしまった。そのまま二人に抱えられてブリンバスターで投げられ、背中を痛打してしまう。大崎が苦しんでいる間に男共はエプロン下に隠していた鉄鎖を取り出し、雁字搦がんじがらめで彼も鉄柵に括りつけていく。

「お前も特等席だ。来栖が廻られるところをよおく見ているんだな」

「放しやがれええつ。真琴おつ、真琴おおつ！」

必死にもがいて脱出を試みる大崎だが、チェーンは全く緩まず、ただただ彼の絶叫が虚しく響くだけだった。

「いぞおおつ、黒河あつ！ 脱がしちまえーつ！」

観客は、ついに誰も止める者がいなくなつた歓喜に沸き返る。

金髪ゴリラはその声援に応え、真琴の胸を覆っている赤い上着の部分を破り、さらに白い布地を下にずらしてしまった。見事な球体がプルンツとプリンのように揺れた。

『おおつ、ついについにいつ、来栖真琴の大きなおっぱいが露わになつたあああつ！』
コスチュームから零れ落ちんばかりにして乳房が姿を現すと、アナウンサーのテンションが上がった。

「ああつ……いやあああつ！」

真琴は上半身を左右に揺すつて抵抗しながら目一杯叫ぶが、観客達の歓声でかき消されて自分でも聞こえないほど。

「見てみるよ、来栖う。スクリーンにもデカデカと映ってるぜっ」

いやらしく嗤う彼に言われて顔を向けると、メロンのようにまるつとした大きな膨らみが、大画面に映し出されていた。

「……いつ、いやあああああつ、見ないでえええつ！」

真琴はスクリーンを覗てサーッと血の気を引いたが、すぐにそれが羞恥の熱へと変わり、血が滾るように全身が熱くなつてしまう。

（そつ、そんなあ……わつ、私の胸があんなに大きく映し出されて、みんなに見られているなんて……くうっ！）

抵抗しようにもほとんど動けない。何もできないことが悔しく、人前で乳房を晒す精神的ショックも大きい。

「先輩……ごめんなさい」

真琴を助けに行くどころか、身動きもできず謝ることしかできないアキナ。

この試合においては、真琴達のタッグ以上に黒河と本田の二人の息が合っていた。以前から何十回もアングラ・プロレスでパートナーだった二人は、真琴達よりはるかに場慣れしていて、どうすれば相手を攻略できるかすぐに理解できるのだ。まして凶器まで加われば攻略は容易い。

金髪ゴリラは再び真琴の豊満な乳房を根元から揉みしだき、何度となくその先端を張り詰めさせる。

「相変わらず柔らかくて、揉み心地がいいな。ほおお、もう乳首が勃っているぞ。やはりお前は感じやすいんだな」

「そつ、それは、本田に打たれたツボのせい……」

吐息を漏らし、顔を真っ赤にしながらも反論する真琴。だが明らかに乳輪はプクツと膨らみ、その先端もによきつと顔を出している。

「そうは言っても、みんなが観ているんだぞ？ それだけじゃねえ、お前の恋人の大崎にも見られてるぜ。恋人の前で他の男相手に乳首を勃てるとは、なんていやらしい女だ」

彼の言葉で観衆と大崎の視線を意識させられ、彼女は余計に委縮してしまう。全ての観客の視線が自分に集中していると思うだけで、身体の芯から指先に至るまでの発熱を感じ、顔を背けて羞恥に染めていった。

（みっ、見ないで、剛司っ、私の恥ずかしい姿を……。私だって抜け出したいけどっ……）
胸を隠したくても腕は縛られ、腹部には黒河が乗っかっているため一切動けない。アキナも本田に捕まり、審判すらいない。真琴にとつてこのマットは羞恥地獄と化してしまつたのだ。

NLPや他の団体で闘っているときは、観客に自分のプロレスをもっと見てもらいたいと思つていた。だが今や自分に向けられるのはいやらしい視線だけ。そんなふうに注目を集めていると思うと、羞恥の炎が燃え盛って背筋にゾクゾクツとしたものが走っていく。

「実にいやらしいおっぱいだなあ。よくこんなのをつけて、プロレスやろうと思つたなあ？」

金髪ゴリラが彼女の胸の付け根から餅を捏ねるようにして揉むと、乳輪が盛り上がった

乳頭もツンツとして天を突く。

「そ、そんなのっ、胸があるうがなかるうが関係ないじゃないっ！ んんっ……それよりも、さっさとどけよっ！」

彼女は手の体温を胸越しに感じながらも反論するが、その温かさが後頭部まで熱くさせ、思考力を落としていった。

当然彼は退くはずもなく、さらに両手を胸の頂点に添えて乳首を擦り始める。

「そうはいくかつ。……ほほお、口では反抗しても、肉体のほうは正直なようだな。乳首がコリッコリに堅くなっているぞお」

「んひいいいっ?! ばっ、バカッ……このっ、やめろおっ、くひいいんっ！」

乳輪から先端を軽く擦られるだけで、ピリピリとした電気が胸を起点にして真琴の身体中を駆け回る。擦る回数が多くなると発電量が増し、伝導率もどんどん高まる。時間が経っているとはいえ、ツボ指圧の効果はまだ持続していたため、身体の感度が増しているのだ。

『黒河が来栖の爆乳を揉み回して、乳首がツンツンに尖っているぞおおおっ。なんていやらしいおっぱいなんだあぁあっ!』

スクリーンには彼女の乳房が捏ねられる様子が相変わらず映されている。全ての観衆の視線が、大画面と実際の真琴の身体に注がれている。

金髪ゴリラの指は彼女の乳頭の硬い感触を楽しみつつも、潰すようにギュッと圧力をかけた。

「ひゃひいいいっ!! ちっ、乳首を、つつ……潰すなああっ、あつんっ、うくううんっ!」
「そんなに大きな声を出していいのか? お前の声がみんなにも、大崎にも聞かれていますんだぞお」

再び彼から恋人の名を告げられた真琴はハツとして、湯気が出るくらいに顔を真っ赤にし、唇を閉じてへの字に曲げて黙ってしまう。乳首がこんなに強く抓られているというのに、痛みよりも嬉悦に襲われ、小刻みに震えていた。

(人前で……剛司の前で私を辱めるなんて……。何という卑怯な男なんだっ!)

心の中で恨み節を呟いていると、黒河は手を休めて立ち上がり、鎖を手を取って彼女を赤コーナーのサイドまでズルズルと引つ張っていく。彼はチェーンをコーナーポストに括りつけ、立ったままの真琴の背をポストに寄りかかるように固定した。

ポストにしつかりと鎖を結びつけたあと、金髪ゴリラの目はまじまじと彼女の身体を舐め回す。ふと彼は何かに気づき、ある一点を凝視した。

黒河は女の両脚をその腕力で押し開き、スカートを持ち上げていく。

「おやゝあ、妙にココの部分だけ盛り上がって、色も違うなあ? これはどういことなんだ?」

彼の視線が真琴の股間部に集中すると、確かに純白がその部分だけ液体に浸したように色が変わっている。ゴリラ男は確認しようとして指を伸ばす。

「やつ、やめろおつ、さつ、さわんなあつ！」

脱出しようと彼女は腕を引っ張ってみるが、やはりチェーンは外れない。

彼は脚を押さえつけて指を縦筋へ押し当てて、するとそこから透けた液体が滲み出て、同時に真琴がひゃんつと叫び、ブルブルと震える。少し押しつけただけで、彼の指先にはとろつとした透明汗が絡む。

「おいおい何だよ、これは？　ちよつと触っただけで、指がもうヌルヌルだぞ。試合中にマンコ濡らしてるなんて、たいした変態女だなっ！」

「ちつ、違うつ！　そ、そんなことつ……」

言い訳しようとする彼女だが、恥ずかしさで血液が頭に集中し、言葉は途中で喉に詰まってしまう。

「実際に濡れてないかどうか、みんなに見せてやるよっ！」

ゴリラ男は股間部の布を簡単に破いてしまった。そこに当てられていたものが落ち、真琴の桃色の縦筋が露わになってしまふ。

「いつ、いやあ——つ、見ないでえ——っ！」

観客や皆に見られたくないと思琴は絶叫して股を閉じようとするが、ゴリラ男の腕力に



は及ばず、涙が滲んでいく。

彼はリングに落ちたものを拾い上げたあと、それが何かを理解して真琴の目の前にぶら下げる。

「へえ、試合前からナプキンを入れてたのかあ。あらかじめマンコを濡らしちまうのがわかってたから、これを入れてたんだろ？ そのいやらしい姿を、客にも観てもらえよっ！」

「いや——っ、いやあ——っ、見ないでええ——っ！」

反対側のリング下カメラが、真琴の股間の様子をズームアップしていった。

大画面には破かれて露出した薄桃色の媚肉が映し出され、観客がざわめく。

『あああ、ついに来栖真琴のピンクの秘部が、大画面にでかでかと映っておりますっ。なんて卑猥なオマンコなんだあああっ！』

「おおつ、これが来栖のオマンコかあ。いやらしすぎるぜえ」

「あまり使われていないようだが、濡れ方が凄いな」

媚肉からトローリと滴る淫液が途切れることなく溢れているのを、彼等はギラギラと目を輝かせて画面越しに眺めている。

（うっうっ……こんな大勢の前で、痴態を晒してしまうなんて……恥ずかしくて、惨めすぎるうっ）

何もできない悔しさと、これまでで最大の羞恥が襲ってくる。ビクビクと震え、呼吸も乱れ動悸が激しくなっていく。

画面が切り替わった途端、場外の大崎が全身を揺すって暴れだしたが、鎖は解けることなく、ガシヤガシヤと金属音を出すだけ。

すると本田が、チェーンで雁字搦めにされたアキナを転がしながらリング内に入ってきた。

「恥ずかしい奴だなあ。試合中にマンコ濡らしてたのかよ。本当におめえはドMの変態レスラーだなっ！」

「そつ、それは、あんたがツボを押したから……」

黒き女王様に言葉で煽られ、真琴は虚ろだった目を剥いて言葉を返す。だが既に彼女は羞恥に肉体を焼かれ、脳髄すら痺れ始めていて、強い言葉は出てこなかった。

「まだそんなこと言えるのかい？ ならばみんなの前で、あんたにもっと恥を掻かせてやるからなっ！」

本田は隠し持っていた銀色に輝く細長い針を彼女の眼前に取り出す。それは本田・雪野組と対戦したとき、雪野が使ったものと全く同じものである。

「これが何なのか、わかるだろう？ こいつであんたをさらに、カメラの前で悦よがり狂わせてやるからなあ。安心しな、雪野みたいに流血させることはしないからさあっ！」

第五章 闇の狂宴 その2

「あのっ……と、トイレに、いかせて……下さいっ！」

我慢できなくなつたのか、アキナがついに口火を切る。襲ってくる便意で、後輩は菊の蕾だけでなく全身を震わせていた。

「そうはいかないわ。私もこの程度じゃあ、今までの恨みなんか晴らせないしねえ。まだまだ我慢してもらうわっ」

二人の前に姿を現した本田がパチンツと指を鳴らす。鼻の下を伸ばした観客がその合図で真琴達を囲むと、ズボンのチャックを下ろし、膨張した一物を次々に取り出した。彼女達の前で一物が露わになると、二人の顔が青ざめていく。

「なっ、まさか……?」

「まさかじゃあねえよ。これからあんた達を、さらに辱めてやるのさっ！」

彼女達は四肢を地についた状態から抜け出そうとする。だが男共の力で手足を押さえられていたため、身動きできないでいた。

真琴の尻たぶに客の両手が置かれたと思つた瞬間、一気に男根で牝花を貫かれる。アキナも同時に別の客の男根で犯されていた。

「あぐうううっ!! だっ、顔も知らない奴に、また強姦されるなんてえっ……」

瞳を見開いて、ショックを受ける真琴。

「へっへっへっ、あの来栖のマンコを犯すことができるなんてなあっ！」

男は真琴を犯すことに興奮し、腰を動かし始める。

「じゃ俺は口を犯してやる。おらっ、こいつを唾えるんだっ！」

目の前にいた客が待ちきれなくなり、真琴の唇を割っていきり勃った怒張を突っ込む。

「んむふううっ?! んぶっ、んぐっ、んんううう——っ！」

歯を立てるなど言いながら、客は腰を振りたくっついていく。

最初何が起きたか判然としなかった真琴だが、男根を唾えているんだと理解すると吐き気を催した。

（んっ、男の汚い物を、口へ入れてくるなんて……汚らわしいっ）

フェラチオを知らない彼女の口腔に、客は興奮に任せて肉槍を前後させる。それが喉奥へ侵入する都度、真琴は嘔吐感に襲われ、息ができずに苦しむ。喉が塞がれているため、唾液が溢れてダラダラと下唇から零れていく。

「んぶふううっ、ぶぐうっ……んぐっ、んぶっ、んんっ……」

アキナのほうも咽喉と牝花を犯され、肉体は彼等の自由にされるがままだった。だが後輩は社長と淫行を繰り返してきたため、慣れているのだろう。スムーズに肉柱を唾え、積極的に舐めているようにも見える。

「おおうっ！ こっちの娘は意外とエロいなあ。嫌がる素振りも見せずに、俺のチンポをしゃぶってくるぜっ」

彼女は実際、喉に違和感を感じることもなく、唾液を絡ませた舌を動かしている。

「んぶっんぶっんぶうっ……はむはむ、んうう、じゅるるうっ、ぶじゅうっ……」

後輩は無意識に肉槍を吸い込み、自ら欲するように首を伸ばして口腔で扱きだす。社長の調教により、後輩は心のどこかで一物が愛おしいとすら感じていた。後輩自身、快楽に蝕まれているとは気づいていない。

客はそうとは知らずに、嬉々として肉槍をストロークさせていく。有名女子レスラーを犯しているんだという優越感に浸り、興奮が収まらない。

スクリーンには、真琴達が無残にも上下の穴を肉柱で貫かれる映像が流れる。リングは熱気というよりも、男達の性の欲望に包まれていた。

しかし彼女達の尻孔には何も埋まっておらず、男根に媚肉を掻き回される最中にも、常に菊門は震え、便意が気になって仕方がない。

真琴の牝花を犯していた男がふと視線を下に移し、ヒクヒクと蕾が動いているのに気づいた。その様が滑稽に見えたのか、指で何度も押して弄びだす。

「はううっ!! そっ、そこはいじらなあああっ? だめだめっ、漏れるからあああっ!」
便意の切迫感に焦り、彼女は肉柱から口を離して叫んでしまう。

「おいっ、何やってんだっ。ずっと唾えてろってんだよっ!」
「むふうううっ?! おぶうっ、ぐぶうっ、んぼあっ!」

真琴は前にいた客に、再び怒張を喉奥まで突っ込まれ、瞳を白黒させた。男は彼女の頭を掴み、肉柱を根元まで侵入させていく。喉奥の嫌悪感に涙が溢れてきてしまう。

(ううっ、もうこんなの、いやあああっ！ んくううう……)

彼女達には抵抗するすべがなく、悲鳴すら上げることができずに、便意を我慢して犯され続ける。快樂と便意がごちゃ混ぜになって、二人の意識が混濁していく。

「NLPのトップだった来栖が、今や男達の慰み者になっているなんてなあ。いいざまだよ、本当にな」

本田は真琴が男根に凌辱されているところを見ながら、ゾクゾクッと身震いしていた。

しかし真琴の耳にはその言葉すら届かない。上と下の穴を肉柱に犯され、お腹は牛乳で満たされて、必死で屈辱と排泄感と快感に耐えているのだから。

男共は彼女達が苦しんでいる様を喜び、己の欲望の赴くまま腰を振るだけだ。

「うおおっ、もっ、もう射精してしまいそうだっ！」

「おおっ、俺も射精すぞおおっ！」

真琴達もがき苦しんでいるのをよそに、観客は息を荒げて昂ぶっていく。彼女達は前後を男に挟まれ、肉槍で喉と膣の肉を掻き回す激しいピストンを受ける。

「いっ、いくぞっ。来栖のナカに射精るううっ!!」

男達は至高の悦楽にうち震え、二人の喉や膣内へ精を放出したっ！

グビユグビユツ、ドビユ——ツ、ドビユ——ツ、ドビユウウツドビユウツ!

「ぐぶうううつ?! ぐぼつぐぼおつ、ぐうぐうううううつ!!」

「んぐうううんつ、んぐつんぐつ、んううんつ?! んふうううううんつ!!」

彼等がマグマの如く煮え滾った精を放出した瞬間、真琴とアキナも同時に絶頂に達し、背を仰げ反らせてビクンビクンツと痙攣する。

真琴は喉と膣に精を受けて、自分がアクメを感じたことに驚いていた。しかしアキナは膣内にザーメンを受けて絶頂することを心から悦び、口内のザーメンを恍惚としながら飲み下していった。

射精感に浸っていた観客が満足して、真琴の媚肉からゆっくり男根を引き抜く。赤い牝花を白く染めて、濃厚な濁汁がドロリと垂れる。

頭部のほうにいた男は、一物を喉膣から抜くと真琴の顔に残り汁を吹きかけ、亀頭を頬に擦りつける。濃い白汁は彼女の髪や、額にも飛んで汚した。

「ぐばあああつ! ごおおおつ、ごほつごほつ……気持ち悪い、ううう……」

真琴は咳き込みながら、唾液と混ざった白濁汁を吐き出す。顔が腐臭液に塗れた彼女の姿には、トップであった女子レスラーの威厳が感じられない。

(……ま、また膣内に射精されて、しかもイッてしまうなんて……うつ、んくうつ!)

しかも子宮内にゲル状の液体を注がれたのを実感した途端、また腹がギョルギョルと鳴

り出した。みるみると真琴は顔を青くして、呼吸を乱していく。

「もっ、もうだめえええっ！ 出ちゃうっ、出ちゃうううっ！ ……おっ、お願いっ、トイレに……いっ、いかせてえっ！」

今は強姦されたことよりも、早く腹部の中身を排泄したい一心で、他に何も考えられなかった。彼女はブルブル震えながらひたすら焦り、何度もトイレにいかせてと願う。菊の蕾も痙攣し、白い滴が漏れ始める。

「おっ、お願いしますっ、もう我慢できないのおおっ！ なんでもしますからあっ……は、早くううっ！」

アキナも呻きながら顔を蒼白にし、全身を痙攣させていく。

「いいや、まだ駄目だ。……かといつてすぐに出されても困るしな。おいつ、アレを持ってこいっ！」

黒河に命令された後輩レスラーが、何やら長い物を持ってきた。それは五十センチ以上あり、真ん中の部分を折り曲げることが可能で、両端は亀頭かたどを象っている。

「ああ……ま、まさか?!」

その棒状のものを見たアキナは、どうやらこれからすることを理解してしまったようだ。後輩は泣きながら嫌々をするように首を振っている。

「まずは、お前のはしたくないマンコを犯やってやるからな！」

アキナにそう言った男が彼女の両脚を支えて正面から抱え、駅弁の体位で一物をズブズブと埋めていく。

「ああうううっ、いやいやあつ、漏れるっ、漏れちゃうよおおおっ！」

後輩は肉棒に貫かれて嬉悦に震えるが、何よりも膣壁を隔てて腸側に圧迫を受けたせいで、排泄感が一番に気になってしまう。

真琴の相手は金髪ゴリラだった。彼女を軽々と抱き上げて自分にしがみつかせると、反り返った肉竿を牡汗が垂れた花弁へ打ち込んでいく。

「はう——っ?! んああつ……まつ、また、入って……きたあつ。そつ、それよりも、トイレにい……」

やはり真琴も、膣内が犯されていることよりも、グルグルと鳴る腸内のほうが気になって焦っていた。立ったまま自分を犯すゴリラ男に対し、トイレにいかせてほしいと懇願する。だが彼は、容赦なく肉竿を膣肉へ埋めていくばかり。

そこに後輩レスラーが近づいてくる。アキナを支えながらのその手に持っているのは、さっきの長い棒——双頭デイルドーだった。

彼に向けて合図するようにニヤリとした黒河が、抱えた真琴の尻を持ち上げる。

「こいつで塞いでやるよ。ほら……よつとおおっ！」

ググッ、ググウウッ、ズブウウウウッ!

後輩レスラーの言葉とともに、手に持つ棒が真琴の蕾に向かって一気に突き刺された。「ぐあああ——っ?! あうううっつ! おっ、お尻があああっ、はっ、入ってくるう……」彼女の絶叫が体育館に響く。引き締まっていた肛門はぐにゅりとへこみながら疑似ペニスを受け入れた。真琴はその異物感にゾゾツと背筋を凍らせてしまう。

さらに男はアキナの蕾にも双頭ディルドーを刺し、二人を一本のディルドーで繋げた。「あぐうううっ!? ううっ……おっ、お腹がああ……あううっ!」

「これなら漏らすこともないから安心よねえ?」
嗤いながら姿を現したのは本田だった。

黒き女王様は曲がついている真ん中の部分を持って左右に揺らす。

膨満感でいっぱいだというのに、双頭ディルドーが真琴達の腸内を掻き回す。片方の先端がアキナに埋まれば真琴からは引き抜かれ、真琴に刺さればアキナの肛門が捲れ返る。

確かにこれなら漏らす心配はない。しかし真琴の膣内には黒河の肉槍が収まっていて、それだけでも腸内への圧迫感を感じていた。加えてそのディルドーを突き入れられると、膨満感がむしろ増していく。

つまり真琴にとつては苦しみが大きくなっただけで、地獄の始まりに過ぎなかった。

アキナもそれは同じ状況であり、黒河の後輩に膣内を掻き回されて困惑を隠せない。しかも彼は既に興奮しきっており、ガツンガツンと腰を突き上げてくるのだ。

「ううくううっ！ 奥う、ひあああつ！ お腹にも響いて……ううっくううっ……」

その振動の波によつて、彼女の悦楽と不安感は煽られ、意識を混乱させていく。

真琴の腹が大きな音を鳴り響かせる。

ギョルルウツ、ギョルルツギョルツ、グギョルルルウウツツ！

（あううっ、お腹があ……痛いっ！）

ディルドーが奥に突き入れられると、真琴は吐き気すら催してしまふ。逆に抜けない程度に引かれれば、彼女は排泄感を催して鳥肌を立てていく。

「はおおおううっ!? おつ、お腹のものっ、出し入れしないでえええっ！」

本田は彼女の声を聞かず、むしろその滑稽さを嗤いながらディルドー抽送のスピードを速める。ピストンを繰り返されると、その排泄感にもどこか心地よさの感覚が生まれた。

ひたすら嫌がついていた真琴の声が、次第に嗚咽へと変わっていく。

「どうだい、来栖さんよお。ケツの穴が気持ちよくなつたんじゃないかあ？」

「そつ、そんなわけ、あるはずがないわっ……おおうっ、あおおううっ！」

髪を振り乱し、汗を飛ばしつつ、己の肉体的変化に戸惑う真琴。

（お尻のほうで感じてしまうなんて、そんなの絶対にありえないっ！）

彼女にとつて尻孔はあくまで排泄器官であり、快感を生む性器にもなることは絶対に認めたくなかつた。だが腸壁を擦られるたびに、淫らな奇声を上げる真琴がそこにいる。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)




全国書店で
好評発売中



**少女天使の暴走が
平和な学園生活を破壊する!!**
シリーズ急展開のバトル&エッチ!!

思春期なアダム4 聖域の崩壊
[小説: さかき傘 / 挿絵: 天海雪乃]



呪詛喰らい師2
[小説: 蒼井村正 / 挿絵: 或十せねか]

全国書店で
好評発売中



全国書店で
好評発売中



**クトゥルフの娘たちが
学園祭でメイドさんに変身!?**
ルルたちに新たな邪神が這い寄る!

魔海少女ルルイエール2
[小説: 羽沢向 / 挿絵: ヒエール☆よしお]

**凄腕退魔士の咲妃を
牝奴隷に堕とす新たな敵の登場!**

既刊LINEUP

- 仙界学園戦姫 / プナガッ! ①~③
- ビルグリムメイデン ①~④
- 不死の吸血鬼がDSのご主人様を募集しているようです

- 思春期なアダム ①~③
- 呪詛喰らい師【ケースイーター】
- 女幹部メル様のカセイ征服計画!
- 借金お嬢 크리스 ①~③
- 無敵の姫騎士がDMに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園 ブラックキャット



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

ヴァルキリエ
http://www.comic- Valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

cranberry
http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

mille-feuille
http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

モバイル二次元ドリーム
http://www.2d-dream.jp/



二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!